

はじめての

万葉集

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすくご紹介します

vol.113

寧楽の故郷を 傷惜む歌

この歌は『万葉集』巻八「秋の雑歌」の部に収められており、直前の「一六〇三番歌と同じ天平十五（七四三）年の秋に作られたとみられます。この歌の直後には大伴家持の歌「高円の野辺の秋萩このころの暁露に咲きにけむかも」（二六〇五番歌）が配されます。春日と高円の地はともに平城京の東に位置します。今城が春日の山の黄葉を歌い、家持が高円の野の秋萩を歌い返し、今や廃都となつて見るのがかなわない平城京の秋景をしのんでいます。今城と家持は親交があり、このように歌を詠み合うことがありました。

秋されば 春日の山の黄葉見る
寧楽の都の 荒るらく惜しも

大原今城 卷八（二六〇四番歌）

秋になると春日山の黄葉が見える奈良の都が荒れていくのは惜しいことだ。

この歌が詠まれた当時の都は恭仁京で、平城京から遷都して三年目の秋を迎えていました。遷都に伴い、今城や家持など臣下の人々も恭仁京へ移っていましたが、住み慣れた平城京に心を寄せる人は多く、荒れてゆく「寧楽の故郷」を惜しむ歌が『万葉集』巻六にも見えます（一〇四四〜一〇四九番歌）。

（本文 万葉文化館 竹内亮）

ところがこの頃、聖武天皇は恭仁京を離れ、紫香楽宮での造営事業に邁進していました。同年の秋七月に紫香楽宮へ行幸した聖武は十一月まで恭仁京へ戻らず、十月に「大仏造立の詔」を紫香楽宮で発しています。十二月には費用がかかりすぎることを理由に、恭仁宮の造営が停止されました。

その後の紆余曲折を経て、天平十七（七四五）年に都は平城京へ戻ります。遷都後の同二十（七四八）年には今城は平城京一条三坊に居住していたこ



所 奈良市春日野町
園 奈良公園室
☎0742-27-8028

春日山原始林

春日大社の神域として古くから狩猟や伐採が禁じられてきた春日山は、原始的な植生を残していることから国の特別天然記念物に指定され、世界文化遺産「古都奈良の文化財」の構成資産にも登録されています。春の山桜、夏の新緑、秋の紅葉など、季節ごとにさまざまな姿が見られ、四季の移ろいを感じることが出来ます。

万葉ちゃん
の
つぶやき

和歌や
作者などに
関連するものを
紹介するよ!



万葉ちゃん

8月号の和歌の振り仮名について、「いずち」は「いづち」の誤りでした。また、解説本文2段目の6行目「七五三番歌」は「五七三番歌」の誤りでした。お詫びして訂正します。